

北海道銀杏会 第32回講演会

日時 2018年11月29日(木) 18時30分～20時30分

場所 ホテルサンルート札幌3階 「宗谷」

講師 医療法人社団心劇会 さっぽろ駅前クリニック院長 横山 太範 様

本日は、医療法人社団心劇会 さっぽろ駅前クリニックの横山院長を講師にお迎えし、「働く人のうつ病と発達障害」と題してご講演いただきました。

先生は東京サイコドラマ協会認定ディレクターの資格も有し、心理療法としてのサイコドラマ等を活用された治療で大きな成果をあげていらっしゃいます。サイコドラマ（英；Psychodrama、日；心理劇）とは、患者自らが即興劇を通じて傷ついた心を見つめ直し、気持ちを表現することで心を癒やしていくものです。法人名にある「心劇」もそれに由来しています。精神疾患は適切な診断と治療によって必ず症状を改善できるとの信念を持って、先生は仕事をされていると感じました。

講演はまさに劇を見ているかのようにテンポ良く、未知の世界にグイグイと引き込まれていきました。先生は最後に、精神医療において専門性に裏打ちされたより高度な診断ならびに治療の必要性を力説され、それによって自分らしく生きやすい社会（職場）が実現できると締めくくられました。（以下の概要では、ほんの一部分しかお伝えできないことをご容赦下さい）

ご講演いただきました横山院長と参加された会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

〈ご講演の概要〉

1. 入院中心医療への反省と呪縛

- (1) 西洋フランスでは1793年に精神疾患患者の閉鎖病棟からの開放が実現。一方日本では、1965年に保護拘束がようやく廃止される。1984年には、入院患者が職員による集団リンチなどで死亡するという痛ましい宇都宮病院事件が発覚。精神保健法制定へと繋がり、入院は悪であるとの流れが定着してしまった。
- (2) 入院とは患者をしっかりと観察し診断できる方法であるが、それができないために精神科・心療内科の診断書は患者の言うがままとなる面があり、安直な「福祉への入場券」のごとく見られている。職場復帰に際しても、厚労省ガイドラインでは主治医の診断書を過信せず産業医がきちんと判断すべきとされており、情けない状況にある。

2. デイケア等を用いた外来精神医療の展開 (1) ～働く人のうつ病と復職支援

- (1) うつ状態を呈する疾患は数多くあるものの、同じ薬を処方するなど治療はまだ手探り状態。また、復職できる基準についても医療者側では精神症状の改善でよいと考えるのに対し、職場では就労に耐えうるレベルを求めており、ギャップがある。中途半端な改善での復職は、プレゼンティズム（出勤してはいるものの、労働遂行能力が低下している）となりやすく、極めて高い確率で再発し、難治性うつ病に移行するリスクが高い。
- (2) 当院は、「デイケア」と「職場場면을再現したプログラム」により復職支援（リワーク）を行っている。デイケアを用いることでスタッフの観察による客観的評価が可能となり、プログラムにより行動・思考パターンの修正を行っている。リワークは自分らしさを新たに見つめ直すチャンスと考えている。リワーク研究会の調査より、リワークは統計学的にも明らかに効果があることが確認されている。

3. デイケア等を用いた外来精神医療の展開（2）～発達障害と就労支援

- （1）青年期・成人期になってから「自閉症スペクトラム障害（ASD）」の疑いで受診するケースが増加している。成人ASD者の復職支援も、本人のコミュニケーションスキルの低さや、復職環境が整っていないこと等により困難な状況。
- （2）そのような発達障害者に対して、デイケアとサイコドラマ等を用いた復職支援を実施してみたところ、統計学的にも効果があることがわかった。サイコドラマによって人への信頼感が高まり、傷ついた心が癒やされること等が要因である。当院では 2015 年に発達障害者の就労支援デイケア（北海道ワークサポートプラザ）を開設。デイケア修了者の大半は社会適応できている状況にある。

4. まとめ

- （1）精神医療が目指すべきは、公平で安全な職場、そして自分らしく生きやすい社会の実現。
- （2）そのために医師は、現在の状況で良しとするのではなく、高度な専門性に裏打ちされた診断と治療に全力で取り組むべき。

（文責 渡辺知博）